

國學院大學學術情報リポジトリ

Book review : Kaori Yamazaki, "A Study on the Legend of the Empress in Kojiki"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Terada, Keiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000072

〔書評〕

山崎かおり著 『古事記』 大后伝承の研究

寺田恵子

本書は、『古事記』中・下巻に登場する「大后」についての論を中心にとめたものである。著者は、「古事記では、大后

が天皇と同等、もしくはそれ以上の重みを持って語られること

がある」こと、「日本書紀に比して古事記では女性が主体的に

行動している」ことに着目し、「古事記の大后の伝承、特に日

本書紀にはない古事記の特徴的な叙述に注目して考察してい

く」とその研究方針を述べている（序章）。この方針にした

がって本書が目指すのは「古事記において『大后』と称される

人物たちが、どのような性格を持っており、そこにどのような

共通的性格が見出せるのか」（本書第一章）という点を明らかにすることにある。

本書の構成を次に示す。

序章

第Ⅰ編 総論

第一章 古事記の「大后」

第二章 上代日本における「大后」の意味

第Ⅱ編 伝承論

- 第一章 伊須氣余理比売の誕生—神武紀丹塗矢伝承の背景—
- 第二章 など躰ける利目—伊須氣余理比売と大久米命の間答歌について—
- 第三章 伊須氣余理比売の「患苦」—神武記謀反伝承の一考察—
- 第四章 神武記謀反伝承における歌謡の考察
- 第五章 古事記の比婆須比売命—常世国との関連を中心に—
- 第六章 神功皇后（息長帯比売命）の神託の意義—古事記を中心に—
- 第七章 石之日売の歌謡—「宮上り我が上れば」を中心に—
- 第八章 仁徳記の「三色に変わる奇しき虫」
- 第九章 石之日売命の人物像—筒木宮伝承を中心に—
- 第十章 石之日売の詔—死刑を命じることの意味—
- 第十一章 「太后」長田大郎女考—安康天皇殺害事件を中心に—
- 第十二章 若日下部王の人物像—雄略記の求婚伝承を中心に—

- 第十三章 若日下部王の奏上—日下の服属と太陽信仰—
- 第十四章 雄略記の「天語歌」の表現
- 第Ⅲ編 系譜論
 - 第一章 古事記の太后とその背後氏族
 - 第二章 息長帯比売命系譜の意義
 - 第三章 忍坂之大中津比売命考—系譜を中心として—
 - 第四章 手白髪命考—継体天皇の太后の背景—
- 終章
 - 第Ⅰ編「総論」は、本書の骨子ともいうべき部分で、「太后」についての概観を示し、これを考察した論考二編からなる。第一章では、「太后」の研究史から検討を始め、古事記に記される八人の太后の伝承を検証して、古事記の太后を「天皇の正妻の意ではなく、天皇の妻の中でも特に大きな力を持つ偉大な太后」とする。第二章では、「太后」という呼称に注目して、その意味を探る。ここでは日本上代の文献の用例を調査した後、漢籍の「太后（太后）」の用例も視野に入れて「太后」の基本的な意味を考察し、これを「天皇と同格の権威を持つ特別な后」と結論づけている。
 - 第Ⅱ編「伝承編」は、古事記の太后の各伝承を考察し、その

性格、伝承の意義を論じている。ここで取り上げられるのは、「伊須気余理比売」(第一章〜第四章)、「比婆須比売命」(第五章)、「神功皇后」(第六章)、「石之比売命」(第七章〜第十章)、「長田大郎女」(第十一章)、「若日下部王」(第十二〜十四章)である。特に複数の章で論じられる「伊須気余理比売」、「石之比売命」、「若日下部王」の各大後の伝承についての考察は詳細にわたり、示唆されるところも多い。

第三章では、古事記の伊須気余理比売の感情を表す「患苦」という語を手がかりとしてその行動の意味を探り、第四章では伊須気余理比売の二首の歌謡について、『五行大義』『漢書』五行志等の内容をもってその解釈に結び付け、この二首にうたわれる「雲」に、それぞれ伊須気余理比売と神武天皇が象徴されていること等を論じる。この二つの章で、著者は古事記における「大后」伊須気余理比売が積極的に皇位継承問題に介在していく存在であると論じており、それはまた、日本書紀と異なる古事記の主張でもあるとする。これは大筋において肯われる説であろう。なお著者は、伊須気余理比売の二十一番歌謡「畝傍山 昼は雲揺ゆ 夕されば …」について、その「昼」から「夕」へと推移する時間表現に着目して、「昼と夜、朝と夕が共に詠み込まれる歌は万葉集などに多いが、昼と夕が共に詠み込

まれる歌は、上代においては管見の限り当該歌以外に見あたらない。」と指摘している。この指摘はこの歌が上代の歌謡、和歌の中にあつて、昼夜、朝夕の結びつきから逸脱していることを示しており、重要なものであると思う。

第七章は、古事記の石之日売命の歌謡五十八番の「宮上り」の語に注目した論である。「上る」の日本書紀、古事記の用例を検討して、この語が基本的には「古事記においては「都(天皇の皇居)あるいは倭へ行く」という意味で使用されており、「天皇の都が倭以外の地にあるにもかかわらず、『倭へ上る(倭を下る)』としている例は無い」ことを指摘する。その上で、その例外と言い得る当該歌およびその周辺の「上る」の用例が意味するところは、石之日売の故郷の葛城の家を「皇居と同等のもの」とらえ、そこへ上京することを意味するもの」と結論する。第八章は、古事記仁徳天皇記の「三色に変わる。著者は、この虫についての古事記本文の叙述「一度は匍ふ虫と為り、一度は殻と為り、一度は飛ぶ鳥と為りて」(訓読「新編日本古典文学全集 古事記」)の「殻」「飛ぶ鳥」について解釈を試みている。特に従来「殻」とされる字について、真福寺本の表記を重視して「殻」の異体字と定め、「殻(たなつもの)」

と読むべきであるとする説には関心をひかれる。詳細な本文校訂に裏打ちされたこの説は説得力に富み、首肯されるべきものと思う。第十章では、石之日売が大楯連に死を賜る記事を取り上げて、その人物像に迫る。この中で著者は新嘗祭と女性の関わりを論じ、「原始的な新嘗と、国家的な新嘗祭の両方の特徴を併せ持つのが、石之日売命の主催した豊楽（新嘗）であった」と説く。また、「玉釧を剥ぐ」行為については、「釧」の考察、「剥ぐ」の用例の検討を通して詳論されており、具体的なイメージを喚起するすぐれた解釈が施されている。

第十二章では、日本書紀にはない雄略天皇記の若日下部王への求婚伝承について考察する。特にその中の雄略天皇の歌謡（九十番）の解釈では「葉広熊白禱」が若日下部王を象徴することを説き、「思い妻」「あはれ」の語の調査検討から、古事記が若日下部王の立場を重要視していたことを論じる。第十四章は、雄略天皇記の三首の天語歌の雄略記における意義を考察する。歌謡中の「纏向の日代の宮」が景行朝の東西支配と雄略天皇を重ね合わせる役割を果たすこと、三重采女と若日下部王はそれぞれ東（アツマ）と鄙（ヒナ）を暗示した対照的な関係にあり、三重采女の歌謡にうたわれる「ヒナ」が、若日下部王の追和を導いたことを論じる。東西を象徴する二人の女性の歌謡

が配され、最後に「日の御子」雄略天皇の歌謡が置かれたとする図式は魅力的で興味深い。

第三編系譜論は、後背氏族から古事記の大后を論じたものである。第一章では、開化天皇と日子坐王の系譜を検討して、そこにみられる「地域的集団」が古事記のほとんどの「大后」と関わることを指摘している。この集団は、丸邇氏、葛城氏、息長氏を含む大きなもので皇室の姻族集団を形成しているとし、さらに大后それぞれの伝承から考察を進めて、これらの氏族は互いに協力関係にあったと論じている。第二章は、古事記における息長帯比売命の系譜―日子坐王の系譜の検討から、これが関西北部を勢力範囲とする子孫の系譜であり、この地域は息長帯比売とその御子応神の新羅親征後の活動の舞台とも一致することを指摘する。また、対立した香坂王、忍熊王の母、大中比売命は息長帯比売命より皇統に近く先に入内したとみられるのに大后とはならず、その子である二王も皇位継承争いに敗れたことを考察して、息長帯比売がそれまでの皇統の流れを変えたという結論に導いている。

以上、本書が取り上げた大后に関する多くの問題のうち、評者に留意されたものの一部を紹介した。著者は各テーマについて、総じてその研究史や先行論を丁寧な渉猟し、必要な場合に

は詳細な本文校訂、用例調査を行い、誠実な姿勢で問題に取り組んでいる。時にその結論には飛躍が見られることもあるが、そこに至るプロセスには学ぶべき指摘や、示唆に富む説が多くみられる。価値ある論考集であると思う。

なお、末尾には「神名・人名・氏族名索引」「事項索引」「研究者名索引」が付されており、読者の便宜が図られている。

(A5版、四八〇頁、新典社、二〇一三年十二月発行、定価一四〇〇〇円＋税)